

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

「ふるさと山口文学ギャラリー」の 今とこれから

廣 重 順 子 (山口県立山口図書館)

山口県立山口図書館が郷土文学の振興と情報発信を目指し開設した「ふるさと山口文学ギャラリー」(文学ギャラリー)も今年4月で8年が経過したことになります。開設以来、各所から寄贈され、あるいはこつこつと収集に努めてきた山口県の文学関係資料は5千点に及び、それまでに蓄積されていた資料とあわせて約1万5千点の山口県の文学コレクションが形成され、文学ギャラリーの展示と資料提供の基となっています。



▲ ふるさと山口文学ギャラリー

この間に、やまぐち文学回廊構想推進協議会で選定された「ふるさとの文学者」が13人から80人に増えました。



▲ 田布施図書館での一括貸出展示

「ふるさとの文学者」に関する展示は、文学ギャラリーにおける主要な展示テーマですが、ジャンルも作品も多種多様であるため、毎年度展示で取り上げるテーマに迷うほどです。新しく選定された文学者に関する資料も少しずつながら計画的な収集を進めており、一人の文学者をじっくり紹介することも、複数の文学者を組み合わせる展示テーマに展開することもできるようになりました。このような工夫をこらした企画展も25回を数え、この成果を活かすために、県内図書館に展示資料や収集資料をまとめて貸し出す「展示資料一括貸出」も行っています。

また、やまぐち文学回廊構想推進協議会と協力し、さまざまな事業にも連携して取り組んでいます。近年では、やまぐち文学回廊構想推進協議会が主催する「やまぐちの文学おでかけ講座」等の会場で所蔵資料の展示や関係資料リストの配布を行っています。館外での展示機会を増やし、多くの方に作品や関連資料を紹介するだけでなく、興味をもたれた作品を借りて読むことができるという公共図書館ならではのサービスもあわせて提供しています。



▲ おでかけ講座での出張展示

こうした中で山口県立大学附属郷土文学資料センターとは2年に1回、共催で企画展を実施しており、郷土文学資料センターの所蔵資料や研究成果を踏まえた展示は、とりあげた文学者への理解をより深めることができると、来場者からも良い評価をいただいています。

今後においては、資料を収集しその業績を掘り起こしていかなければならない山口県の文学者もまだまだ多く、郷土文学資料センターをはじめとする各関係機関・団体との連携協力を強めながら、「ふるさと山口文学ギャラリー」でより多くの方に豊かな山口県文学の世界を楽しんでもらえるような取組を進めていきたいと考えています。



資料展示「嘉村礒多が残したもの」

加藤 禎 行 (当センター研究員)

2016年1月12日(火)より、4月26日(火)まで、郷土文学資料センターでは、山口県立山口図書館に併設されている「ふるさと山口文学ギャラリー」で、山口市仁保出身の作家嘉村礒多を採り上げ、「嘉村礒多が残したもの」という郷土文学資料の展示を行いました。郷土文学資料センターによる「ふるさと山口文学ギャラリー」での資料展示は、下関市角島出身の作家中本たか子の展示(2010年10月～12月)、萩市出身の作家・編集者

榎崎勤の展示(2014年1月～4月)に続いて三度目となります。いずれも、山口県立山口図書館、やまぐち文学回廊構想推進協議会、山口県立大学文化創造学科のご協力を頂いての展示です。



今回は、山口県立大学が所蔵する嘉村関係資料の全体像を網羅するかたちでの展示構成となりました。嘉村礒多の初刊単行本および初出掲載雑誌、また嘉村家から寄贈された父親の嘉村若松宛嘉村礒多書簡、さらには嘉村礒多が愛用したと伝わる文机・尺八・茶器・急須などの愛用品。また故太田静一氏が所有しておられた嘉村礒多旧蔵の書架などは、その来歴などを紹介する福田百合子氏の証言とともに、今回初めて広く県民のみなさまに展示いたしました。

嘉村礒多顕彰会が尽力され地域に留まることになった貴重な嘉村礒多原稿「彼に帰った彼女」も全日程、複製ではなく実物を展示することになりました。この嘉村礒多顕彰会寄託の直筆原稿は、今回の展示期間中に、顕彰会から郷土文学資料センターへと寄贈されることとなりました。初めての展示ではありませんが、長い期間に亘って、ギャラリーを訪れた地域の方々に、礒多の几帳面な楷書体の筆蹟を見ていただけたことと思います。



嘉村礒多旧蔵書も、本学の嘉村礒多関係資料の大きな特徴です。嘉村礒多が影響を受けた、明治大正期の文学者・知識人との関わりや、礒多の興味関心をうかがい知ることができる貴重な旧蔵書ですが、その蔵書のはしばしに残る、丹念に書き入れられたメモや傍線といった嘉村礒多の読書の痕跡は、現在のわたしたちに、

絶えず新しい嘉村礒多論の着眼点や問題の広がりを示唆してくれているようでもありました。



今回の文学資料展示は、文化創造学科の展開科目「地域実習」でのプログラムの一環として、文化創造学科学生が地域の文化を県民のみなさまにお伝えするグループ活動の成果として、作成されました。本年度もまた2017年1月より、郷土文学資料センターの三十周年を記念した展示を予定しています。機会がありましたら「ふるさと山口文学ギャラリー」まで足をお運び下さい。



江戸時代の奇談の中の大内氏

木越俊介 (当センター研究員)

これまで県内の公開講座やサテライトカレッジなどにおいて、「江戸時代の戯作(小説)に描かれた大内氏」と題してお話をさせていただいてきた。年を追うごとに増補していった結果、少しずつ該当する作品も増える一方、このテーマは他の研究者によっても深められつつある。とりわけ近年、歌舞伎・浄瑠璃については、金昭賢氏『『祇園祭礼信仰記』における韓国—是齋像をめぐる』(『演劇映像学二〇一〇』第4集、二〇一一年)、小説・演劇については、平瀬直樹氏「近世の文学・演劇に描かれた大内氏」(『山口県地方史研究』112、二〇一四年)といった論文が発表され、江戸時代に大内氏を描く作品の多さに驚くばかりである。さらにこれらに指摘されていない、前期読本というジャンルとして一括される短編奇談のうちに大内氏が登場する作品をあげただけでも以下のようになる。

刊年	作者 作品名 該当話
明和三年(一七六六)	都賀庭鐘作『繁野話』 第六篇「素脚官人二児を唐船に携える話」
安永九年(一七八〇)	伊丹椿園作『唐錦』 卷二「佐々木曹五茶師紹芳を討つ話」「桂隼人冤を雪ぎて旧恩を報ずる話」
天明二年(一七八二)	伊丹椿園作『深山草』 卷二「蝦蟇怪をなして小児を取る説」
寛政五年(一七九三)	前田其窓子作『四方義草』 卷三「熊人勝間が勇を伏す話」
寛政七年(一七九五)	一鷹道人作『渚の藻屑』 卷三「額女破笠を認て重遇を全ふす」
文化元年(一八〇四)	生々瑞馬作『一閑人』 卷三「毛利家売卜翁の言を信ず」

今回は、これらの奇談の中から、あまり知られていないものを一点紹介することとしたい。

寛政五年(一七九三年)刊『四方義草』(前田其窓子作)は、全五巻からなる短編奇談集。決して有名な作品ではないが、なかなか粒揃いの内容である。そのうち、卷三「熊人勝間が勇を伏す話」に大内氏が登場する。とはいえ、周防の国主ではあるが、「大内義任」なる架空の人物である。

以下、あらすじを記すと、大内の家臣に「勝間の兵衛」という「力強く飽まで膽太き侍」がいた。この男が領内の百姓といざこざを起し、義任は勝間の狼藉とみなし召すのだが、他の家臣が殿のもとへ連れて行くとしても、ことごとくその腕力の前に追い払われる。そこで齢六十近い「馬淵熊人」という老臣がその役を買って出、やすやすと勝間を主のもとへと運ぶ。義任は「寛仁大度」、勝間の非は認めながらも、逃亡せずにいたことに一目置き、熊人邸へ預かりの身とする。その後、勝間は焦燥感から熊人の目を盗んで逃亡しようとするが、超人的な熊人の能力(この辺りは詳しく記す余裕がないが、とても面白い)の前に全く思い通りにいかない。ついに勝間は熊人殺害に走り、たしかに刀で刺したと思いきや、それは鞠であり、しかも熊人の前に身動きがとれなくなっていたのであった。観念した勝間は己の卑小さと、義任・熊人の情深さを比べて恥じ、「主家十代の武運護奉らん」と誓い自害した。果たして、その後大内氏は「弥武威盛に繁昌」するのだが、十世を経、ちょうど勝間の誓いが切れた時に滅亡した。

大内氏を扱う奇談は、多く陶氏に亡ぼされた歴史的事実を〈果〉とし、様々な虚構により〈因〉を描くところに面白さがある。その点、この『四方義草』の話はやや異色であり、話の主眼は大内氏の主君としての度量と、それに呼応する二人の侍の姿であり、滅亡は付けたりに過ぎない。

滅亡した大内氏は江戸時代に新たなイメージをさまざまにまとい、人々の記憶の中に生き続けた。本話をはじめ、その全体像については、『大内氏の歴史文化をさぐる(仮)』(勉誠出版、近日出版予定)所収の拙稿にまとめたので、興味がある方はぜひご参照いただきたい。

平成28年度の山口県立大学サテライトカレッジ「やまぐちの文学再発見 in 周南」は、以下のプログラムで開催いたしました。

会場：周南市学び・交流プラザ 時間：10:00～11:30 受講料 1,000円

回数	日程	テーマおよび講座内容	講師
1	5.28(土)	『平家物語』に建礼門院の悲劇を読む	当センター長 稲田 秀雄
2	6. 4(土)	江戸時代の小説に描かれた大内氏	当センター研究員 木越 俊介
3	6.11(土)	与謝野鉄幹と林滝野	当センター研究員 加藤 禎行

寄贈図書 (2015年11月～2016年5月)

嘉村磯多顕彰会『嘉村磯多 感想文集』、美東古文書カメの会『ふるさとの歴史 美祢の維新』、田村悌夫『鶴になった俳人 三宅潮鳴』、和気浩子『これは「種蒔の葉」 周防和算家 弘鴻の話』、浜崎勢津子『吉津富子』、熊本玲子『散文集 夕方の匂い』、三好哲彦『山羊のいる風景』、米泉湖文学碑プロムナードの会『米泉湖文学碑プロムナード作品集 山上湖』、原田克行『秋桜…あはれ焚く』

寄贈雑誌 (2015年11月～2016年5月)

『15現代山口県詩選』第52号(山口詩人懇話会)、『文芸山口』第228号,239号,245～247号,276号,277号,279号,282号,283号,308号,324～327号(山口県文芸懇話会)、『其桃』第852～858号(其桃発行所)、『あらつち』第702～704号(あらつち社)、『山彦』第131～133号(山彦発行所)、『すばる』vol.50(すばる俳句会)、『兼崎地橙孫新聞』第15号(兼崎地橙孫顕彰会)、『颯』第101号(颯文化会)、『和海藻』第31号(豊北郷土文化友の会)、『やまぐち文学回廊だより』第1号(やまぐち文学回廊構想推進協議会)、『中原中也記念館館報』第21号(中原中也記念館)、『風響樹』第47号(風響樹同人)、『燔祭』第6号(燔祭の会)、『嘉村磯多顕彰会だより』第8号(嘉村磯多顕彰会)

編集後記

▼今号は山口県立山口図書館の廣重順子氏に御寄稿いただきました。▼図書館に足を運びますと、いつもユニークな展示をされていることにお気付きのことと思います。それが楽しみで図書館に通われている方も多いことと思います。今回はその舞台裏や図書館のスタッフの思いが伝わる記事となっております。▼図書館は、図書の貸出を中心としながらも、図書という「知」で県民がつながる場であり、展示をはじめさまざまな活動が行われております。図書館のウェブサイトにはそうした情報が満載です。もっぱら蔵書検索中心にサイトをご使用されている方は、この機会にぜひ他のページもご覧になるとともに、図書館の展示をはじめとする催し物にぜひご注目ください。▼山口図書館と本センターはこれまで連携して活動をしてきましたが、本年初頭にふるさと文学ギャラリーで開催した展示について、加藤研究員にご報告していただきました。▼本学の授業である「地域実習」の成果としての作家・嘉村磯多についての展示でしたが、原稿や愛用品といった貴重な展示物に加え、彼自身が使用し、書き入れのある旧蔵書が目を引きました。作家の文筆活動を生々しく追体験するような構成となっており、とても見応えのある企画だったと思います。▼最後に、木越研究員が公開講座やサテライトカレッジの場でお話ししてきた、江戸時代の小説などに描かれる大内氏についての記事を掲載しました。その全貌は紹介しきれませんが、思いの外、大内氏が登場する作品は多くあります。▼史実とは異なる、江戸時代に新たな意匠をまとった大内氏の一端に触れていただくことができたのではないのでしょうか。▼次号は当センター開設20周年記念号としてページを増やし、11月発刊の予定です。(K)



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜畠3-2-1)
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2016(平成28)年6月30日